

Café des open



三浦一族

Menu 第28回
鎌倉幕府滅亡と
三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

鎌倉幕府は、宝治元年（1247）、有力御家人であった三浦氏が討たれ、弘安8年（1285）に安達氏が滅ぼされると、執権北条氏嫡流の北条得宗家が政治の実権を握る得宗専制体制となっていきます。しかし、幕府は、蒙古襲来（文永の役、弘安の役）に際し、奮戦した御家人らに十分な恩賞が与えられず、以前から経済的に困窮していた彼らの状況は一層深刻化し、幕府への不満は高まってきました。そうしたなか、幕府打倒に動いたのが、当時、幕府の提案する皇位継承に不満を抱いていた後醍醐天皇とそれを支える者たちでした。後醍醐天皇の倒幕計画は2度失敗し、天皇自身も隠岐に流されましたが、元弘3年（1333）閏2月、

後醍醐天皇は隠岐を脱出し、全国に挙兵を呼びかけました。すでに畿内では、楠木正成らによる幕府への抵抗が続いており、幕府は鎌倉から京に向け、足利高氏（後に尊氏に名を変える）らを援軍に差し向けます。しかし、高氏は上洛すると反旗を翻し、救援するはずだった六波羅探題を攻撃し、滅亡に追い込みました。

一方、関東では上野国で新田義貞が幕府打倒のため、挙兵し、鎌倉を目指し鎌倉街道を南下します。これに対し、北条氏最後の得宗となる北条高時は、追討軍を派遣し、元弘3年（1333）5月15日、分倍河原（東京都府中市）で双方の軍勢による激しい合戦が行われました。『太平記』によれば、この日の合戦で、義貞勢は幕府勢に敗北を喫します。しかし、その晩、義貞のもとに相模の軍勢6千余騎を率いた三浦義勝（大多和義勝ともいう）が馳せ参じたといい、翌16日、この義勝らの急襲により、不意をつかれた幕府勢は、敗北を喫しました。以後、幕府勢は、義貞勢を食い止めることができなくなり、同22日、鎌倉は陥落し、幕府は滅亡しました。こうしたことから、義勝は倒幕に貢献した人物の1人とみることもできるかもしれません。ただし、義勝は、その名が軍記物語である『太平記』の中でしか現れず、他の同時代史料には見えないことから、実在したかについては、疑義もあります。

鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇による建武の親政が始まると、鎌倉には鎌倉将軍府がおかれしました。しかし、建武2年（1335）7月、滅亡した北条高時の遺児の時

行が信濃国で挙兵し、鎌倉街道を南下し、鎌倉を占拠する事態が生じます（中先代の乱）。これを鎮圧するため、京にいた足利尊氏は、関東に向け軍を進め、時行勢との間で合戦となりました。この乱における三浦一族の動きは見逃せません。宝治元年の三浦惣領家滅亡後、惣領家が代々称した「三浦介」を継承したのは、同族の佐原一族でした。その流れをくむ三浦時継は、中先代の乱において、時行勢に与していましたが、子の高継は尊氏勢に加わっていました。つまり、中先代の乱において、三浦氏は、親子で敵味方に分かれ、争う状況となっていた訳です。さらに、時継とともに時行勢に加わっていた一族の時明（若狭判官）は、当時の史料に「凶徒大将」と記されており、時行勢の大將格の立場にあったこともわかります。



分倍河原古戦場跡

乱の結果、時行勢は尊氏勢に敗れます。時継は、尾張国に落ち延びていくものの、現地で熱田神宮の宮司に捕えられ、その後、京の六条河原に送られ、斬首となりました。一方、時明は、懐島（ふところじま／茅ヶ崎市、相模川の中洲の一带）に逃れ、一時、浦人の協力で浜に埋められた大壺に隠れていたものの、その後、壺の中で自害し

たという最期が伝えられています。一方、尊氏勢に与した高継は、知行を安堵されるとともに、室町幕府の「侍所管領」（侍所の統括）となり、活躍していきました。

さて、江戸時代の地誌『新編相模国風土記稿』によれば、分倍河原の合戦で新田義貞に与して武功を挙げたとされる三浦義勝は、田戸の赤門で知られる永嶋家の先祖と伝えられます。義勝は、鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇から重んじられず、中先代の乱では時行勢に与しました。結果、義勝は尊氏勢に敗れ、捕えられますが、楠木正成の仁心により、助命されたといわれます。その後、義勝の子の義政が家を継ぎ、姓を永嶋に変えますが、義政が早世したため、義勝の娘婿に正成の四男を迎え入れました。この人物は、正徳と称し、永嶋家を継ぎ、田戸の聖徳寺の開基となったといわれます。永嶋家は以後、戦国時代は小田原の北条氏のもとで浜代官などを担い、江戸時代は公郷村の名主をつとめるなど、三浦半島を代表する旧家となっていきました。